

元建設省土木研究所次長

石崎 勝義 79

(茨城県つくばみらい市)

## 倉敷の堤防決壊は人災

岡山県倉敷市真備町を流れる小田川の堤防が決壊し、五十人以上も亡くなった。原因としてダムの放流、高梁川の増水で小田川が流れにくくなる「バックウオーター現象」、避難指示の遅れなどが指摘されている。私は決壊の危険がある堤防を放置してきた河川管理者に一義的な責任があると思う。

堤防は原則、土でできている。洪水で越水が始まれば、堤体は容易に浸食され決壊に至る。大量のエネルギーを持った水が奔流のよ

## ミラー

うに流れ出る。人も家も流され避難は容易ではない。しかし国は決壊を防ぐ技術を保有している。

三十年ほど前、堤体の人家側斜面(裏のり)をシートなどで保護することにより、短時間の越水に耐えられるようにする堤防強化の工法(アーマー・レビー)が開発された。二〇〇〇年からは壊滅的な水害を防ぐ方法として堤防強化が全国的に実施され始めた。しかし、ダム建設の妨げになると思ったOBの横やりで事業は中止され決壊の危険は放置されている。

最近では異常な降雨が頻発する。

急流の多いわが国の場合、ダムの貯水容量はもともと大きくなく、洪水のピーク前にしばしば満杯になる。ダムに頼るより堤防強化の方が確実だ。決壊しなければ、越水による氾濫は水量が少なく、浸水の範囲や深さは限定される。ほとんどの場合、二階に上がる垂直避難で間に合うと思う。

堤防強化の経費は小さい。効果が限定的なダムとスーパー堤防建設を中止し、その費用で堤防を強化すれば、十年程度で全国の主要な堤防の危険はなくなると思う。治水当局に再考を求めたい。